

海外だより

アメリカの公衆衛生学校 に学んで

前厚生省児童家庭局衛生課課長補佐
労働省労働基準局安全衛生部労働衛生課

中原 俊 隆

ジョンズ・ホプキンス大学(the Johns Hopkins University)は、アメリカ東部メリーランド州ボルチモア市にあり、ボルチモアの商人ジョンズ・ホプキンスの遺志により1867年に創立されたものである。この大学は、日本流に言えば大学院に相当する医学関係部門(the Johns Hopkins Medical Institutions)が世界的に有名であるが、文学・理学・工学などの大学部門、応用物理研究所、音楽研究所や国際問題の研究所などがあり、undergraduateおよびgraduateレベルの教育や研究を行っている。医学関係部門は、医学(School of Medicine)、衛生学公衆衛生学(School of Hygiene and Public Health)の研究・教育を行っている大学院と医学図書館、病院(the Johns Hopkins Hospital)で構成されている。私は、1978年から1979年にかけてWHOのフェロシップを得て、上記衛生学公衆衛生学大学院のM.P.H.(Master of Public Health)コースにおいて学ぶ機会があったので、アメリカの公衆衛生教育の様子などを御紹介しようと思う。

アメリカには、WHOが認定した公衆衛生学校が18あるが、この学校は、アメリカはもちろん世界でも最も古い公衆衛生学校で、その設立は1916年のことである。従って、設立当時範とする学校はなく、まさにパイオニア的な仕事であったが、その目標を一般公衆の健康の維持・増進におき、生物学、生理学、社会学および行動科学の学校としたのである。そして、公衆衛生およびその基

礎となる科学の分野において、教育・研究・実践に携わる人々に最高度の教育を行ってきた。現在、254人の常勤スタッフ、155人の非常勤スタッフがいる。現在の学長は、D. A. Henderson 博士で、ジュネーブのWHO本部において天然痘の撲滅事業に携わってきた人である。学生数は約800人で、いずれも大学を卒業し、いわゆる「学士号」以上の称号をもっている。この学校は、留学生を多く受け入れていることで有名で、50か国以上の国から来ている。学生の3分の1以上は博士コースか、博士コースを終った、所謂ポスト・ドクトラル・フェローである。また、45%が女性である。

アメリカの他の公衆衛生学校と同じく、この学校も大学院教育のみを行っており、その教育内容は、大別して修士(Master)コースと博士(Doctor)コースとに分かれているが、研究室での個別の仕事以外は、例えば講義やセミナーなどは区別なく合同で行われる。一般には、修士教育は公衆衛生の実践家となるためのものであり、博士教育は公衆衛生の研究者をめざすものである。修士教育には3つのコースがある。一つはMaster of Public Healthと呼ばれるもので、公衆衛生の分野で基本的基礎的な称号である。このコースの学生は、医師・歯科医師・獣医師、あるいは、工学・看護学などの科学を修め公衆衛生経験のある人であるが、生物科学や保健科学を修め、少なくとも2～3年の公衆衛生活動の経験のある人が優先される。本来、このコースは公衆衛生の実務経験のない人を対象とはしていない。そして、現在の技術や開発中の技術、現在の保健上の問題点や将来起こりうる問題点についての認識を深め、各人の能力を種々の保健分野に適用できるよう、幅広い教育が行われている。また、このコースは、経済学、法律、社会学や行動科学を修めた人達が保健分野に進む場合の入口の役目も果している。従って、カリキュラムは、学生のバックグラウンドや将来の仕事の内容、公衆衛生活動に対するデマンドの変化に見合うよう非常にバラエティーに富んでいる。学生には、その関心のある分野のスタッフがアドバイザーとしてつき、科目のとり方などを指導している。このコースを卒業するには最低限一学年を必要とし、4つある必須科目(疫学、

生物統計学, 保健行政学, および, 環境保健科学または病理生物学) および選択科目を履習しなければならない。

Master of Health Science とよばれるコースは, 大学を卒業してすぐの人を対象としている。すなわち, 公衆衛生の実務経験のない人を対象としたコースで, 1ないし2年の間に, 公衆衛生に関する訓練をも含む教育が行われる。Master of Science とよばれるコースは, 将来研究活動をめざす人のためのものである。

博士コースは, 研究を志向する人を対象とし, Doctor of Public Health (Dr. P. H.), Doctor of Science (Sc. D.) および Doctor of Philosophy (Ph. D.) の3種ある。いずれも, 研究のデザインやその実施方法について訓練, 教育し, 結果の解析・解釈や論文の作成について教育することとなっている。この学校では, Dr. P. H. コースが最も一般的で, 公衆衛生の研究者や実践家をめざすものである。Sc. D. コースは公衆衛生の基礎科目を一つ選び, それについて研究するものである。Ph. D. コースは, よりアカデミックな性格が強いものである。

この学校は, このほか, 博士コースを終った人を対象とするポスト・ドクトラル・フェローや, 予防医学に関するレジデント・コース, 特にどのコースにも属さない特別学生などの制度もある。

この学校に日本人が留学するためには, 通常の入学資格要件の他に, TOEFL テストにより英語能力を証明しなければならない。

この学校には, 行動科学, 生化学, 生物統計学, 環境保健科学, 疫学, 保健行政学, 国際保健学, 母子保健学, 精神衛生学, 病理生物学, 人口動態学の11の学部 (department) があり, いくつかの学部は, さらに学科 (division) に分かれている。この学校は, 他の学校に比較し, 行動科学と衛生教育にちからをいれていることで, 昔から知られている。また, 疫学関係は特に優れているといわれている。

日本ではなじみのうすい2, 3の学部を紹介すると次のようである。国際保健学部は, 端的に言えば国際保健機関に働く人々を養成する所ということになる。この学部の目的は, 世界中の保健サービスに恵まれない人々に対する保健活動や栄養および家族計画サービスのあり方を改善することで, 保健計画, 栄養供給, 衛生教育, ヘルス・マン・パワー, 保健補助者の訓練と監督, 栄養や保健サービスと家族計画との関係, 小児栄養などについて研究し, 海外の各種機関との関係も深い。病理生物学 (pathobiology) は, 病気のプロセスを一般生物学の一部として研究しようとするもので, 生物を集団として観察し, 種々の生物における疾病現象を研究することが特徴である。具体的には, 生態学, 医動物学, ウイルス学などを扱っている。人口動態学 (population dynamics) は, 人口現象や人口問題を扱い, ヒトの生殖現象から人口政策まで幅広い研究を行っている。

さらに, いくつかの学部にまたがるようなテーマについては, interdepartmental programs として, 関係学部が協力する体制がつけられている。これに属するものとしては, 保健計画 (health planning), 感染症と免疫学, 人口研究 (population studies), 熱帯病, 人類遺伝学, コンピュータの利用および栄養プログラムがある。なお, この他の科目であっても, 学部間の連携は非常によく, 内容が重複したり, 基礎科目が応用科目より後に講述されるといったことはまずありえない。一般に, 講師は関連する分野については, 他学部で教えている事柄についてもよく承知している。

一学年は5つに分けられており, 第1から第4までの四半期 (quarter) と夏学期 (summer session) とから成る。通常, 4つの四半期をもって一学年としており, 夏学期は出席を義務づけられてはいない。一つの四半期は長くて3カ月, 短かいと2カ月であり, 四半期ごとに科目がかわり評価が行われる。一つの科目は月水金か火木に行われ, また, 授業時間が一時間単位であるため, 名実ともに短期決戦といったかんじで勉強しなければならない。そして, ほとんどの講師は, 毎回何らかの宿題や読書を要求し, ディスカッションに積

極的に参加することを求め、頻回にテストを行う。非常によく勉強させられるが、逆にいえば、勉強すればただけ評価される仕組みとなっている。この国では、学校を卒業すること自体も重要であるが、どのような成績で卒業したかということがより重要であるとのことである。従って、学生は非常によく勉強する。M. P. H. コースの場合、各四半期に16単位、4つの四半期で64単位とらねばならず、10単位について落第点をとれば卒業できない。追試や再試は行われないのが普通である。科目毎の単位数は、授業時間数や要求される勉強量などにより決められている。

勉学の条件はよく整っている。医学関係部門に属する医学図書館、大学全体に属する図書館の他、各学部の図書館や学部連合の図書館などがあり、深夜まで開いており、図書館によっては夜間も閉めない所もある。土曜、日曜ももちろん開いている。蔵書数も多く、図書カードが完備しているため図書の検索も容易である。また、司書がよく文献検索を行っているし、視聴覚教材やコンピューターの利用も盛んである。さらに、各学部の行うセミナーが学生にも公開されており、毎日どこかでセミナーが開かれている。学外から講師を招くことも多く、時には、中国やアメリカなどから来た演者もいる。多くのセミナーは昼休みに行われ、ハンバーガーなどをかじりながらセミナーを行っている。

学生同士のディスカッションも盛んで、学生控室ともいべき部屋では、いつも学生がおしゃべりやディスカッションに精を出している。また、金曜日の夕方にはhappy hourと称して、学部スタッフと学生がビールなどを飲みながら懇談する時間がある。公式の学生団体として自治会組織があり、新聞を作ったりしているが、学生側の反応は少いようである。ただ卒業式の時、学生が最も教え方が上手であったスタッフを選んで、ゴールデン・アップル賞なるものを贈り、表彰することになっている。

入学式は、オリエンテーションの一部のようなもので非常に簡素であったが、卒業式は盛大なものであった。スタッフも学生も、中世を想わせるガウンを着用し、角帽をかぶり、学長から卒業証書をもらい、フードをかけてもらう。フ

ードは、得た称号により色が異なる。但し、すべて貸衣裳である。父兄が多数つめかけ、卒業を祝う。非常に厳やかなセレモニーではあるが、適度にリラックスした面もあり、なかなか楽しいものであった。M. P. H. コースを卒業したのは138名であり、約半数は医師(M. D.の称号をもつ者)であった。ちなみに、Master of Health Science 卒業生54人、Master of Science 20人、Ph. D. 18人、Dr. P. H. 9人、Sc. D. 13人であった。

ボルチモア市はアメリカの内湾であるチェサピーク湾に面した、商業・漁業の港町である。従って、海産物が豊富で、特に、カニやカキはとても旨い。気候は、夏蒸し暑く、冬はとても寒い。ワシントンやフィラデルフィア、ニューヨークにも近く、また、種々の文化施設もある。わずか一年の滞在であったが、厳しい学問の世界に触れ、また、アメリカ人の生活の一端にも触れることができたのは、貴重な体験であった。

(なかはら としたか)